

## 「権威ある新しい教え」

マルコの福音書 1:27~28

### はじめに

聖書は神の御言葉です。しかし実際、聖書には人が言った言葉も多く記されており、悪魔、悪霊が言った言葉さえ記されています。もちろん御使いや預言者のように、神によって語らされた、別の存在を用いてはいても実際は神が語られたと理解できる場合も多くありますが、今日取り上げる箇所はどうでしょうか。一見人が自分の意志で意見を述べているだけのように見えると思います。ではこのような箇所は神の御言葉ではないから必要ない、読まなくてもいいと言わなければならないのでしょうか。もしそうだとしたら聖書には読む必要のない箇所、記す必要がなかったような箇所が多く存在することになってしまいます。聖書はすべて神が人を通して書かせた、神の御言葉の書物です。ですからたとえ神以外の存在が言ったように記されたものであったとしても、御使いや預言者の場合のように、それらはすべて神によって語らされたがゆえに、神が聖書に書き記させられたと考えるべきではないでしょうか。今日はそのような考えのもとに以下の御言葉に取り組んでみたいと思います。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:27 人々はみな驚いて、互いに論じ合った。「これは何だ。権威ある新しい教えだ。この方が汚れた霊にお命じになると、彼らは従うのだ。」

### 1. 権威ある

前回に引き続き場所はガリラヤ地方、湖畔の町カペナウムでの出来事です。イエシュアは安息日に会堂に入り聖書の教えを説いておられましたが、そこに汚れた霊に取りつかれた人がいて、突然イエシュアに向かって叫び出しました。イエシュアはすかさずこの霊を叱りつけ、汚れた霊をその人から追い出されたという出来事が起こりました。この出来事が指し示す意味については前回お伝えしましたが、今日はそれを目の当たりにした人々の反応について描かれた箇所を見てみたいと思います。「人々はみな驚いて、互いに論じ合った。」と記されています。「これは何だ。」と言って人々は論じ合い、そしてこの出来事を「権威ある新しい教え」と呼びました。これはもちろんイエシュアがそう呼ばれたのではなく、周りでこの出来事をただ見ていた人々が言ったものですが、聖書に記されたもので取るに足らない無意味な言葉、必要のない言葉などありません。聖書はすべて神によって書かれたのですから、この言葉も聖書の御言葉として捉えたいと思います。ヘブル語ではこの「権威ある」という部分にガーヴァル(גָּבַר)「強める、強くする」という意味の動詞が、そしてハーダーシュ(חָדָשׁ)「新しい」という意味の形容詞、そしてトラー(תּוֹרָה)「教え」という意味の名詞が使われています。これら三つの言葉がそれぞれ聖書で最初に使われた記述を見ながら、その本来の意味を見つめなおし、その上で改めてこの「権威ある新しい教え」とは何か、これが指し示すものとは何かを考えてみたいと思います。

ではまず「権威ある」と訳されたガーヴァルという動詞について。この言葉は創世記 7:19 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

創世記

7:17 大洪水は四十日間、地の上にあった。水かさが増して箱舟を押し上げたので、それは地から浮き上がった。

7:18 水がみなぎり、地の上に大いに増し、箱舟は水面を漂った。

これは大洪水によって地上に住むすべての生き物が滅ぼされたノアの箱舟の物語の一場面ですが、ここで「水が『みなぎり』」と訳された部分に聖書で最初のガーヴァルが使われています。この水がガーヴァル、みなぎることで「箱舟は水面を漂った。」と記されています。「漂った」と訳されていますが、ここには「歩く、行く」とも訳されるハーラフ(הלך)という動詞が使われており、本来は「川が流れる」(創世記 2:14)と訳される言葉です。つまり箱舟はふらふらと当てもなくさまよったのではなく、ある目的地に向かって進み出したということです。このように、ガーヴァルとは本来、箱舟の中にいたものたち、すなわち神がお選びになったものたちを救い、新しい地に進ませる、導くという意味があると考えられます。

## 2. 新しい

次に「新しい」と訳されたハーダーシュについて。この最初の言及は出エジプト記 1:8 になります。

【新改訳 2017】

出エジプト記

1:7 イスラエルの子らは多くの子を生んで、群れ広がり、増えて非常に強くなった。こうしてその地は彼らで満ちた。

1:8 やがて、ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起こった。

1:9 彼は民に言った。「見よ。イスラエルの民はわれわれよりも多く、また強い。」

これはエジプトに移住したヤコブ、すなわちイスラエルの家族が、その後多くの子孫を生み、先住民たちよりも多く、また強くなったということが記されている記述です。ここに「『新しい』王が起こった。」という箇所には聖書で最初のハーダーシュが使われています。このようにハーダーシュとは本来、強く数多い民であるイスラエルの民の上に立つ「新しい王」という存在を指し示していると考えられ、まさにこれはアブラハムとその子孫とに神が与えられた約束の成就、すなわちイスラエルによって地上のすべての民族を祝福するという神の御計画の完成、神の家、神の国が建て上がるその時を指し示していると考えられます。そしてそこに立つ「新しい王」とはもちろん神の御子、メシアであるイエシュアであると考えられ、つまりハーダーシュとは本来、神の国の王、イスラエルを中心とした世界を治める王としてのイエシュアを指し示していると考えられます。またこのハーダーシュの動詞形「新しくする」という意味のハーダシュ(חדש)の、その最初の言及を調べても、同じような意味を導き出すことができます。

【新改訳 2017】

I サムエル記

11:14 サムエルは民に言った。「さあ、われわれはギルガルに行って、そこで王政を樹立しよう。」

11:15 民はみなギルガルに行き、ギルガルで、【主】の前にサウルを王とした。彼らはそこで、【主】の前に交わりのいけにえを献げた。サウルとイスラエルのすべての者は、そこで大いに喜んだ。

これはイスラエルの最初の王サウルが即位し、イスラエルの民が初めて王政国家となった時の記述ですが、ここで「王政を『樹立しよう』。」と訳されているのが聖書で最初のハーダシュです。このようにハーダシュの動詞形、ハーダシュが本来指し示すものと同じくイスラエルの民によって王国を樹立すること、すなわちイスラエルを治める王が立てられることを指し示していると考えられます。

### 3. 教え

そして「教え」とは「律法」とも訳されるトーラー(תּוֹרָה)です。この最初の言及も見てみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

26:4 そしてわたしは、あなたの子孫を空の星のように増し加え、あなたの子孫に、これらの国々をみな与える。あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。

26:5 これは、アブラハムがわたしの声に聞き従い、わたしの命令と掟とおしえを守って、わたしへの務めを果たしたからである。」

これは神がアブラハムの子イサクに語られたものですが、「あなたの子孫を空の星のように増し加え、あなたの子孫に、これらの国々をみな与える。あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。」という約束は彼の父アブラハム、そして彼の息子ヤコブすなわちイスラエルにも語られています。この約束、契約を成就させるものとして「おしえ」トーラーが記されています。このようにトーラーとは本来、アブラハムの子孫すなわちイスラエルを祝福し、そのイスラエルによって「地のすべての国々」に祝福を得させるためのものであると言えます。

このように、「権威ある新しい教え」とはヘブル語の視点で考えるならば、神がお選びになった者たちを救い、新しい地に住まわせるという神の御計画であり、また同時にそれはイスラエルの新しい王、メシアであるイエシュア、そして強く数多い国民となるイスラエルの子孫によって地のすべての国々は祝福される、という神の御計画を指し示すものであると考えられます。ここまでの内容を簡潔にまとめると以下ようになります。

御言葉	ヘブル語	最初の言及	本来の意味が指し示すもの
権威ある	ガーヴァル(גָּבַר)	創 7:18	神に選ばれた者を救い、新しい地に導く
新しい	ハーダシュ(חָדָשׁ)	出エ 1:8	強く数多い国民となるイスラエルの上に立つ王
教え	トーラー(תּוֹרָה)	創 26:5	神とアブラハム（その子孫）との契約の成就

このように、人々が勝手に自分の意見を述べているだけのような言葉の中であったとしても、それは神によって書かれた神の御言葉であり、そこには神の御計画が表されているということが言えます。

#### 4. 互いに論じ合う

またカペナウムの会堂で、イエシュアの教えを聞き、またイエシュアが汚れた霊を追い出された出来事を目撃した人々は「これは何だ」と言って「互いに論じ合った」とも記されています。その結果彼らはこの「権威ある新しい教え」という一つの答えを導き出しました。これを上記のようにヘブル語の視点で解釈したかどうかは分かりませんが、彼らのこの動向も一つの「型」と捉えることができると考えられます。つまりそれは聖書の御言葉を聞き、そこに記された様々な出来事に目を留める者は「これは何だ」という意味か、何を指し示しているのか、という問いかけを持ち、さらに「互いに論じ合う」ことによって、聖書に記された神の御計画は解き明かされていくという、私たちが聖書とどのように向き合うべきかを示した一つの「型」と考えられます。ここで人々が「互いに論じ合った」と訳された箇所にはシャーアル(לַחֲשׂוֹת)「尋ねる、頼む、求める」という意味の動詞が使われていますが、この最初の言及について見てみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

24:42 今日、私は泉のそばに来て言いました。『私の主人アブラハムの神、【主】よ。私がここまで来た旅を、もしあなたが成功させてくださるのなら――。』

24:43 ご覧ください。私は泉のそばに立っています。若い娘が水を汲みに出て来たなら、私は「あなたの水がめから少し水を飲ませてください」と言います。

24:44 その人が私に、「どうぞ、お飲みください。あなたのらくだにも水を汲みましょう」と言ったなら、その娘さんこそ、【主】が私の主人の息子のために定められた方です。』

24:45 私が心の中で言い終わらないうちに、なんと、リベカさんが水がめを肩に載せて出て来たのです。そして、泉に下りて行き、水を汲みました。それで私が『どうか水を飲ませてください』と言うと、

24:46 急いで水がめを肩から降ろし、『お飲みください。あなたのらくだにも水を飲ませましょう』と言われたので、私は飲みました。らくだにも水を飲ませていただきました。

24:47 私が尋ねて、『あなたは、どなたの娘さんですか』と言いますと、『ミルカがナホルに産んだ子ベトエルの娘です』と答えました。そこで私は、彼女の鼻に飾り輪をつけ、彼女の腕に腕輪をはめました。

24:48 そして私はひざまずき、【主】を礼拝し、私の主人アブラハムの神、【主】をほめたたえました。主は、私の主人の親族の娘さんを主人の息子に迎えるために、私を確かな道に導いてくださったのです。

これもまた神によってではなくアブラハムのしもべが自分で語ったように見て取れる言葉です。彼は自分の主人から一つの任務を受けて旅立ちました。それは主人の息子すなわちアブラハムの子イサクの妻となる女性を見つけ出すというものでした。彼は神に祈り、そして神はアブラハムの兄弟ナホルの孫娘

であるリベカと出会わせます。ここでもベガリベカに対し 24:47「私が『尋ねて』』という箇所には聖書で最初のシャーアルがあります。このようにシャーアルとは本来、神がアブラハムのために、そのしもべの任務を果たさせてくださったように、神がその御計画のために、人に与えられた任務、役目を果たさせるという意味合いがあると考えられます。この事実から、このように言うことができます。聖書を読み、問いかけを持って「互いに論じ合う」なら、人は自分に与えられた役目を、神によって果たすことができ、そしてそれが「アブラハムの神、主をほめたたえる」ことになるということです。

私たちが聖書を読むのは、そこに示された神の御計画を知り、まるでテレビのドラマや映画を見るような感覚でただそれを味わって感動するというものではなく、このシャーアルの本来の意味が指し示すように、自分の役割を知り、まさにドラマや映画の俳優のように、聖書に記された数々の登場人物たちのように、神の御計画という名の壮大な物語、舞台の中で自分に与えられた役を演じ切る、神によってそれを果たし終えるためであると信じます。ですから私たちは決して神の御計画の前の観客、聴衆ではありません。自分だけに与えられた役割、働きが必ずあるのです。聖書を通して、どうか神がその役割を私たちに明らかに示してください、そして果たさせてくださいますように。

## 5. 聞き従う

しかし神が私たちに役目を与えておられるからと言って、それを忠実に果たすことができるだろうかと心配したり、失敗したらどうしようなどと不安になったりする必要はありません。それは「これは何だ。権威ある新しい教えだ。この方が汚れた霊にお命じになると、彼らは従うのだ。」と記されているように、たとえ「汚れた霊」神に逆らう霊、悪霊でも神の御心、御計画に従うのです。それは「汚れた霊」がきよい霊に変わるという意味ではなく、悪役がいるからこそ正義のヒーローが引き立つように、彼らは彼らとして神の御計画の一部だということです。ですからたとえ私たちが弱くても、愚かでも、それによって神の御計画が妨げられたり、失敗したりすることはありません。むしろその問題や欠点を通して神は御自分の計画を進められ、不可能を可能にする神の御力の素晴らしさをお示しになり、「アブラハムの神、主がほめたたえられる」結果を造り出されるのです。これが私たちがその役目を果たす、神に「従う」ということの内実であると考えられ、人の能力や努力がそれをするのではないことが示されていると考えられます。

またここで「彼らは『従うのだ。』」と訳されている箇所に使われているヘブル語はシャーマ(שמעו)「聞く」という意味の動詞で、創世記 3:8 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

創世記

3:8 そよ風の吹くころ、彼らは、神である【主】が園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。

この出来事は、エデンの園において神の命令に背いたアダムとエバが、神の「御顔を避けて…身を隠した」場面です。ここで彼らは「主が園を歩き回られる音」を、「聞いた」と訳されている部分に聖書で最初のシャーマがあります。シャーマ「聞く」ことによってアダムとエバが取った行動、それは「主の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した」ということでした。このようにシャーマとは本来、神から隠さ

れる、離れ去ることを指し示していると考えられます。事実、「汚れた霊」はイエシュアの声聞いて、そこから離れ去って行きました。またそれは同時に人が神の御計画を理解できなくなってしまうている、信じられなくなっている事実をも指し示していると考えられます。「主が園を歩き回られる音」と訳されている箇所には先ほども取り上げた「歩く、行く」という意味の動詞ハーラフが使われており、目的、目標に向かって進む、導くという意味であると述べました。神が目指しておられる目標とは御自分の計画を成就、完成させること以外にありません。神の御計画の音、すなわち声、御言葉をシャーマ、「聞く」聞き従うこと、信じて受け入れることから、私たち人は、遠く離され、隠されてしまっている、つまり神の御計画を理解できない、信じられなくなっていることがここに示されているとも考えられます。しかしイエシュアが「汚れた霊」をその人から追い出された、取り除かれたという出来事、その事実の中にイスラエルの民及びイエシュアを信じるすべての人から「汚れた霊」すなわち偶像礼拝の霊を取り除き、真にシャーマ、神の御声、御言葉を信じて受け入れ、聞き従う者にしてくださいることが次に指し示されていると考えられます。

## 6. ガリラヤ

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:28 こうして、イエスの評判はすぐに、ガリラヤ周辺の全域、いたるところに広まった。

これはつまりガリラヤ中の人々がイエシュアのことを「聞いた」ということです。ですからヘブル語ではこの箇所にもシャーマが使われています。ガリラヤ(גליל)、この名前の語源はガーラル(גלל)「転がす」という意味の動詞にあると考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

29:1 ヤコブは旅を続けて、東の人々の国へ行った。

29:2 ふと彼が見ると、野に井戸があった。ちょうどその傍らに、三つの羊の群れが伏していた。その井戸から群れに水を飲ませることになっていたからである。その井戸の口の上にある石は大きかった。

29:3 群れがみなそこに集められたら、その石を井戸の口から転がして、羊に水を飲ませ、その石を再び井戸の口の元の場所に戻すことになっていた。

29:8 …群れがみな集められて、井戸の口から石を転がすまでは、それから、羊に水を飲ませるので「す。」

29:9 ヤコブがまだ彼らと話しているとき、ラケルが父の羊の群れを連れてやって来た。彼女は羊を飼っていたのである。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブが、故郷であるカナンを離れ、ハランの地へ行った時の出来事ですが、彼はそこで大きな石のふたがついた井戸を見つけます。その傍らに三つの羊の群れが伏していて、さらにそこにもう一つ、ラケルの羊の群れが加わって合計四つの羊の群れが集まった時に、大きな石のふたをガーラル「転がして」群れに水を飲ませ、その後再び石をもとの位置に戻すことになって

いたという記述です。これがガーラルの最初の言及なのですが、ここには非常に重要な神の御計画が表されていると考えられます。すなわち井戸のふたとなっていた大きな石とは、イエシュアを指し示していると考えられます。そして四つの羊の群れとは四方、東西南北すなわち全地、全世界の国々を指すと考えられます。イエシュアがガーラル、初めにおられた所から転がされる、降ろされる、つまり天から降りて来られることによって、すべての羊の群れに水をのませるように、福音が全世界に宣べ伝えられることが「型」として表されていると考えられます。そして石を再びもとの位置に戻すように、イエシュアが十字架の死からよみがえらされて天に昇って行かれるところまでが表されていると考えられます。

【創世記 29 章でヤコブが見た井戸に表された神の御計画】

- ・ 井戸の口にある大きな石を転がす → イエシュアが地上に降りて来られる
- ・ 四つの羊の群れに水を飲ませる → 全世界に福音を宣べ伝える
- ・ 石をもとの場所に戻す → 十字架の死からよみがえらされて天に上られるイエシュア

ですからこのガーラルを語源とするガリラヤという地名には、全世界に福音すなわちイエシュアについての知らせを宣べ伝えるという意味が指し示されていると考えられます。つまり「ガリラヤ周辺の全域」と訳されてはいますが、ヘブル語の視点で見るとこれは全世界、全地、すべての国々の神がご選びになった人々を指しており、全世界に福音が届けられることが表されていると考えられます。そして究極的には、全世界がイエシュアにシャーマ「聞き従う」という「神の国、御国」が建てられることが表されていると考えられます。

## 7. 神の御計画

「聞く」という意味のヘブル語、シャーマの最初の言及にあったように、今日人は神の御計画を「聞く」、知る「聞き従う」ことから遠く離れ、神の側からもそれは奥義として隠されてしまっています。特にイスラエルの民、ユダヤ人たちに対してはそうです。彼らの多くは未だにイエシュアがメシアであることにさえ気づいていません。しかし一方私たち異邦人の教会の多くは、彼らイスラエルの民に対する神の約束の成就が神の御計画の完成と密接な関係があることに気づいていません。しかしだからと言って神の御計画が滞ったり妨げられたりするようなことはありません。今日取り上げた箇所のように、気づいていない人を通してでも、神の御計画は表され、そして進められて行くのです。私たちの教会もそんな神の御計画について気づいていない、隠されている者の一人です。しかし知らないから、理解できないからと言って、神には御計画があるということに無関心であってはなりません。なぜなら人は神の御計画に目を留めないならば、自分の計画、自分本位の願望に従って、自分に関わることばかりを考えて生きようになるからです。たとえ神を信じていると言っても、神を自分の願いを叶える存在、自分の問題を解決する存在として捉えるならば、はっきり言ってそれは自己中心であり偶像礼拝となんら変わりません。ですから私たちは神がそれを明らかにしてくださっても、そうでなくても神の御心、御計画を知ることが求めましょう。そしてそれがなるように、ただ神の御計画だけがなるようにと祈りましょう。イエシュアの御名によって。